「福富草紙」の二系統の本文について
——その語彙の比較から考える——

染谷 裕子

Two Versions of "Fukutomi Zoshi":
A Comparison on Their Vocabulary Usage

Hiroko SOMEYA

〈要　旨〉

「福富草紙」の二系統の本文、通称「福富草紙」「福富長者物語」はその本文が全く異なる。本稿は、それぞれの代表的本文について考察したものである。その結果、本文の成立時期について「福富草紙」は13世紀末頃までさかのぼり、「福富長者物語」は17世紀初頭までひきさがるのではないかとする。また、「福富草紙」はことばと絵が一体となって作品を構成しているのに対して、「福富長者物語」はことばは絵から遊離しており、絵はすでにその役割を失っている。そして、「福富草紙」が第三者である読者に対する特別な意識がないのに対して、「福富長者物語」は読者に対する明らかな言語意識を持つと考える。

〈キーワード〉

福富草紙絵巻、福富長者物語、語彙、絵との関わり、成立年代

一　はじめに

御伽草子の一つ『福富草子』には、大きく分けて二つの本文の系統がある[1)]。それぞれ「福富草紙絵巻」、「福富長者物語」と一般には呼ばれることが多い。

前者は原則として二巻、後者は一巻の体裁をとる。共に放屁の芸による成功譚と失敗譚からなる点は共通するが、その本文は前者が登場人物のほぼ会話だけで構成されており、後者は一篇の物語という構成からなる。また、失敗譚が内容の中心であり、「福富」なる人物が登場する点では共通するが、前者はその失敗譚の主人公が「福富」であるのに対して、後者は「乏少」である。さらに、二つの系統の本文は全く異なり、本文対照が可能ではない。

一方、この二系統の本文に伴う絵の部分は共通している。すなわち、「福富草紙絵巻」の絵巻の後半部分（二巻本の下巻）の絵を、「福富長者物語」の絵巻ではほぼそのまま踏襲している。

この点をどう解釈するかによって、二系統の本文の関係について見解が分かれている。

すなわち、その見解を大別すれば、一つは「福富草紙」の絵詞と「福富長者物語」の本文は別個に存在し、後から「福富草紙」下巻の絵が「福富長者物語」と結びついたというものであり[2]、もう一つは「福富長者物語」の本文成立に「福富草紙」の絵（または絵詞）が影響しているというものである[3]。

ただ、その成立時期については、「福富草紙」の絵詞が「福富長者物語」本文に先行する点では見解が一致している。

「福富草紙絵巻」の成立については、その原本の成立は14世紀末以前と言われる[4]。最も古いとされる伝本、京都妙心寺、春浦院蔵の絵巻が後崇光院（1372—1456）の宸筆と伝えられ、それが確かであることが榊原悟氏によって証明されている[5]。

また、榊原悟氏によれば、鳥羽僧正の時代（12世紀）に成立した『ざれ絵』の中に放屁合戦に登場する尼君が「福富草紙絵巻」上巻の主人公「高向の秀武の娘」と名乗っていることから、その絵詞の成立はさらに遡る可能性もあるという[6]。

「福富長者物語」については、その伝本がみな江戸期以降のものではあるが、本文成立は15世紀末から16世紀初めともいわれる[7]。

さて、以上のごとく、内容的には同じ作品でありながら、その成立時期も本文の性格も異なる、この二つの系統の本文を言語の立場から比較してみると、どのような結果が得られるであろうか。その違いは、一方がほぼ台詞のみで書かれたテキストであり、一方が物語の体裁をとっていることと関わるのか、あるいは成立年代の違いによるものなのか。本稿では、特に語彙という点に焦点をしぼって、この問題を考えていく。

テキストとしては、『室町時代物語大成　十一巻』（角川書店）に翻刻されている、春浦院蔵の絵巻（作品番号340）と赤木文庫蔵の絵巻（作品番号341）を使用する。『大成』によれば、それぞれの系統で最も古いとされる伝本である。前者は複製本が数種あるので[8]、翻刻文と対照した（その結果、翻刻の解釈が異なる部分が若干あった）が、後者は閲覧不可能な上、複製本もないので全く翻刻文によった。

この二つの本文を言語の立場から、表記・文法について簡単にふれた上で、主としてその語彙の比較をしていきたい。なお、便宜上「福富草紙絵巻」を「草紙」、「福富長者物語」を「物語」と呼ぶことにする。

二　文字・仮名遣・語法に関する概要

(1)　表記

共に漢字交じり平仮名文であるが、その漢字使用の比率は異なり、「草紙」に比べ「物語」は漢字使用率が高い。

草紙　総文字数3923文字で、漢字使用は362文字（9.2%）
　　異なり漢字は108文字

物語　総文字数4578文字で、漢字使用は658文字（14.4%）
　　異なり漢字は247文字

御伽草子の漢字調査をされた石井久雄氏によれば、御伽草子のうち、「狭衣の草子」「明石物語」「阿弥陀の本地」「玉藻の前物語」「花鳥風月」「目蓮の草紙」（室町写本のテキストを使用）においては、文字（延べ字数）に対して漢字の占める比率は漢字比率は約6～9%、その異なり字は64～86であり、頻度の高い文字は（作品の内容に関わるものは別として）だいたい似通っているという[9]。「草紙」の漢字使用がこれらと類似するのに対して、「物語」の漢字使用は、これらとかなり異なっている。

(2) 仮名遣い

四つ仮名の誤りは、「草紙」に、づ→ずの1例、「物語」に、じ⇔ぢの2例が見られる。

・まことに、秀武とも申さし、けふのさえ、はすかし（草紙338下・2）
・お中すしはり引つりて（物語348下・13）
・さと、ちらし侍るは、水はちきのことし（物語349上・12）

長音の開合の誤りは二本ともに見られるが、「草紙」はou→auの誤り1例のみであるが、「物語」はau→ouの誤り3例の他、拗長音の開合の誤りも4例（うち2例は「けう（興）」）もあり、開合の誤りが少なくない。

・いちなう（一能）、つかまつれ（草紙338上・8）
・のふのふ、よいとのや（物語348下・10）
・朝とく、ものにもふてけり（物語352上・16）
・日にそへ、いとうよはり（物語351下・12）
・おほやけかたにも、きこしめしつたへたまひ、けうしおはしましけると（物語346上・1）
・今出川の、中将殿と申は、わかき殿にて、かゝること、けうし給ふとなれは（物語348下・15）
・なも、くゐめうちやうらい（帰命頂礼）、ゆや三しよ権現（物語351下・4）
・士農工商の外の、ゆふみん（遊民）は（物語346下・3）

(3) 語法

(イ) 連体形終止は「草紙」で9箇所、「物語」で16箇所みられ、その内容は以下の通りである。（＊）のついた語は終止形終止と共用している。

	草　紙	物　語
動詞	＊いまする	あなひする・おぼゆる・せかする・わぶる・をる
形容動詞	＊けうな	
助動詞	＊ける・＊つる2・＊ぬ2・らるる・るる	＊ける・＊たる・なる（伝聞）・める

(ロ) 係り結びの状況については以下の通りである。係り結びの誤り及び消滅は「物語」のみに見られ、共に「ぞ」の結びに見られる。

A 福富草紙の場合……正27・流れ1・省略2

ぞ3　なむ0　や(は)4　か6　こそ19

B 福富物語の場合……正14・流れ6・消滅1・省略5・誤り1

ぞ7　なん1　や11　か1　こそ7

(ハ) 活用および活用形については、それぞれ口語活用が見られるが、二段動詞の一段化は二本とも見られない。ハ行下二段動詞のヤ行化の例は「物語」のみに見られる。

A 福富草紙の場合

口語活用　助動詞な1（「おかしさに、はらはた、きれぬはかりな」）

B 福富物語の場合

口語活用　まつきな（真黄）1・よい（連体形）2

ヤ行化　おしゆ2

(ニ) 助動詞の種類

助動詞の違いについては、両者に時代差というより、文章の差による違いが見られる。

すなわち、会話文主体の「草紙」物語文主体の「物語」という状況が反映されている。

助動詞	草紙	物語	助動詞	草紙	物語
き	1	13	ぬ	13	4
けり	7	22	べし	7	11
けん	0	1	まし	1	0
ごとくなり	0	2	まじ	2	1
ごとし	0	1	まほし	0	1
さす	5	2	む	5	1
じ	5	3	めり	2	1
しむ	1	0	やうなり	0	1
す	4	3	らむ	2	1
ず	12	23	らる	5	3
たし	0	2	らん	0	5
たり	33	18	り	3	7
つ	0	13	る	8	7
なり（伝聞）	1	1	ん	32	13
なり（断定）	38	27	んず	5	0

三　語彙（自立語）の考察

(1) 基本的な作業

まず「草紙」「物語」の二本に見える自立語すべてについて、『分類語彙表』（国立国語研究所）の分類を基準にして分類番号をつけてみた。『分類語彙表』の数字が、「体」「用」「相」の類につ

いて、小数点第二位までは関連づけられる[10]（たとえば、1.17と2.17と3.17は品詞は異なるが語彙としては関連する）ことから、「体」「用」「相」の類の横に並べて、各類に属する異なり語数を表１に示した。

《表１》	1（体）		2（用）		3（相）		4（その他）	
	草紙	物語	草紙	物語	草紙	物語	草紙	物語
10　こそあど	9	10			14	17		
11　関係	2	4	3	7	6	8	7	8
12　存在	0	2	15	18	8	10		
13　様相	0	2	2	3	6	7		
14　力	0	0	0	0	0	1		
15　作用・変化	1	4	47	89	0	2		
16　時間	15	21	2	7	17	18		
17　空間	11	26	2	2	0	0		
18　形	1	4	0	3	0	1		
19　数量・程度	10	8	1	0	16	24		
20　自他・男女・老少	36	26						
21　家族・夫婦	1	9						
23　社会階級	6	17						
24　成員	4	7						
25　公私	2	0						
26　社会	2	4						
30　精神・感情・感覚	17	20	24	57	24	29	0	1
31　言動	1	4	8	8	0	1	8	11
32　創作（呼びかけ）	0	0	0	0			3	1
33　文化・風俗・生活	6	6	16	25	2	7	2	3
34　義務・身上	3	6	5	5	4	7	0	0
35　交渉・交際	1	1	4	9	0	1	0	0
36　支配・統治・待遇	1	1	11	7	0	2		
37　取得・所有・経済	3	2	13	7	1	2		
38　仕事・職	0	0	1	6				
40　物品	1	0						
41　資材	2	3						
42　衣	14	17						
43　食	4	8						
44　住	3	19						
45　道具	1	7						
47　土木	1	6						
50　光・色・音・臭	3	5	1	4	13	13		
51　自然・物質	3	13	2	8	0	1		
52　地形	0	3			0	0		
55　植物	3	6			0	0		
56　動物	1	10			0	0		
57　からだ	18	39			0	0		
58　生命・生理・病	3	4	5	6	1	1		

不明語	2	5	0	0	0	0	0	0
計	191	329	162	271	112	152	20	24
「草紙」総語数（異なり）485語			「物語」総語数（異なり）776語					

(2) 考察1——数量的に見て

二本のそれぞれの総語数（異なり語）は、「草紙」485語、「物語」776語である。この点から単純に考えれば、各分類で「草紙」の二倍弱は「物語」に見えていいはずである。ところが、所属語が「草紙」の方が「物語」より多いグループがある。これを「草紙語彙の幅が広い場合」としてまず検討する。また次に、共にある程度の所属語があるが、「物語」の方が「草紙」のおおむね三倍以上の所属語を持つ類を「物語語彙の幅が広い場合」として検討する。

①草紙語彙の幅が広い場合

(イ)「自他・男女・老少」(20) に関する語彙

草紙のみ	共通	物語のみ
あがきみ（吾君）あれ（吾）おれ（己）おれら（己）かやつ（彼奴）きやつ（彼奴）ごぜ（御前）すやつ（其奴）たれ（誰）ぬし（主）まろ（麿）もの（者）やつ（奴）	なにがし（某）ひと（人）	そこ（其処）われら（我等）ひとびと（人々）よのひと（世人）
おんかみ（御神）さへのおんかみ（賽の御神）しんぶつ（神仏）みさきのかみ（御前の神）	かみ（神）	おに（鬼）まうりゃうきじん（魍魎鬼神）
をとこ（男）をんな（女）をんなども（女共）おきな（翁）おほぢ（祖父）みつご（三子）わらは（童）	うば（姥）	をのこご（男子）ねんね　わらはべ（童）
しちじゃうのふくとみ（七条の福富）しちじゃうのふとね（七条の福刀禰）たかむこのひでたけ（高向の秀武）ひでたけ（秀武）ひでたけおきな（秀武翁）ひでたけまろ（秀武丸）ふとね（福刀禰）	ふくとみ（福富）	いまでがはのちうじやうどの（今出川中将殿）うたいち（歌都）おにうば（鬼姥）ためいち（為都）とうた（藤太）ふくとみのおりべ（福富織部）ぼくせう（乏少）ぼくせうのとうた（乏少の藤太）めうさい（妙西）わけのきよまろ（和気清麻呂）

「草紙」では人称詞が多く、男女老少にかかわる語も「物語」に比べて多い。「草紙」では自分か相手かそれ以外の者か、男か女か老少かというように人間のとらえ方がきわめて視覚的で単純である。これは、「草紙」が絵に依存した会話だけでほぼ構成されていることと関連する。「物語」にはこれらの語があまりない。代わりに、上の表には示していないが、「家族・夫婦」(21)「社会階級」(23)の語彙が多い。これは、「物語」が絵に依存せず、絵を説明することによって生じているわけであるが、一方で「物語」の人間のとらえ方が人間のステイタスによっていると見

てもいいのではなかろうか。固有名詞においては、「草紙」では上下巻のそれぞれの主人公の名しか登場しないが、「物語」では主人公以外の周辺の人物の名が（明らかにそのステイタスが分かるような表現のしかたで）示されることとも関連するように思う。

なお、「奴」と「人」、「をとこ」と「をのこご」、「わらは」と「わらはべ」のような対立（前者が「草紙」後者が「物語」）は、成立年代差というより、ある言語意識の差が感じられる。

(ロ) 「支配・統治・待遇」(36) や「所得・所有」(37) に関する「用」の語彙

草紙のみ	共通	物語のみ
やとふ（雇）たすく（助）めぐむ（恵）まかす（任）せだむ（責）かうず（勘）こらす（懲）すかす（賺）ばかす（化）	をしふ（教） せむ（責）	したがふ（従）ひきたつ（引立）いさむ（諫）をしゆ（教）もてなしはやす（持成囃）
とらす（取）もてまゐる（持参）そなふ（供）うる（売）くる（呉）たいまつる（奉）たうぶ（賜）たてまつる（奉）たまふ（給・四）とみくさる（富腐）	たぶ（賜）たまはる（賜）たまふ（給・下二）	ぐす（具）とる（取）あそぶ（遊ぶ）まゐらす（参）とむ（富）

所属語が少ない中での比較ではあるが、「支配・統治・待遇」の類では、人に対するマイナスの待遇に関する動詞が「草紙」に多い。「所得・所有」の類では授受に関わる動詞が「草紙」に多く、しかもその待遇差がある点に特色がある。これらの点から、「草紙」では人とのやりとりに視点があると言えようか。

また、共通語「せむ」に対する「草紙」の「せだむ」、共通語「たぶ」に対する「草紙」の「たうぶ」、「草紙」の「たいまつる」「たてまつる」に対する「物語」の「まゐらす」は成立時期との関連があると思われる。

(2) 物語語彙の幅が広い場合

①場所を表わす語彙（「空間」の語彙（1.17）・土木建築の語彙（1.47））

草紙	共通	物語
おきどころ（置所）ここもと（此処許）しちじゃう（七条）ところどころ（所々） いぬゐ（乾）かたはし（片端）おほぢみち（大路道）	かしこ（彼処）はし（端）うち（内）となり（隣）	ところ（所）ここ（此処）あなた（彼方）こなた（此方）そち（其方）さかさま（逆様）みなみ（南）よも（四方）うへ(上)した(下)　うへつかた（上方）おんかはくだり（川下）くま（隈）すみ（隅）うら（裏）うしろ（後）まへ（前）なか(中)あたり（辺）かはべ（川辺）きたどの（北殿）くまの（熊野）まりのかかり（鞠掛）おんには（御庭）には（庭）しらす（白州）おほぢ（大路）みち（道）

「物語」には前後・上下などの「方向」を表わす名詞や代名詞が目立つ。たとえば、「前にまわり後ろにまわり」などのように、動きを表現する。草紙の場合は連続している絵によってそれを表現しているとみてよい。

②「食」(43)「住」(44)「道具」(45)「自然・物質」(51)「動物」(56)に関わる語彙

草紙	共通	物語
もちひ（餅）	くすり（薬）	おもの（御物）くひもの（食物）おもゆ（重湯）たなつもの（穀物）おほみき（大御酒）くこん（九献）おんくすり（御薬）
こいへ（小家）		いへ（家）やかた（舘）くら（蔵）ごてん（御殿）かきほ（垣穂）かど（門）しばがき（柴垣）ついぢ（築地）みはし（御階）かはや（厠）とこ（床）のき（軒）むね（棟）こもだれ（菰垂）つまど（妻戸）まんまく（幔幕）みす（御簾）いかう（衣桁）かま（竈）
すず（鈴）		ばん（盤）かはご（皮篭）きぬた（砧）やぶれうちは（破団扇）こゆみ（小弓）まきもの（巻物）
くろがね（鉄） あさかぜ（朝風）しむ（染）	かぜ（風）やく（焼く）	けぶり（煙）ちり（塵）しほゆ（塩湯）みづ（水）みづはじき（水弾）ゆみづ（湯水） かみなり（雷）あまりさむさ（余寒）よさむ（夜寒）しなとのかぜ（科戸の風）ひ（火）かはく（乾）うちしぐる（打時雨）ふきたつ（吹立・四）ふく（吹）ふりみふらずみてんじかえす（点返）ふきたつ（吹立・下二）あたたむ（暖）
だばのこ		いぬ（犬）おほかみ（狼）からいぬ（唐犬）ひとかみいぬ（人嚙犬）からす（烏）すずめ（雀）じやたい（蛇体）か（蚊）むし（虫）かたつむり（蝸牛）

「物語」では、具体的な物の名を表わす語を多くとりいれている。これは、絵の場面を描こうという意図と関連がある。その場面については、すでに絵があり、「草紙」ではそれに依存しているのに対して、物語では絵はすでにその機能を失っているといえるのではないか。「動物」の語彙は主として比喩で用いられる。

なお、「衣」に関しては以下のように、二本とも同程度見られるが、「物語」の方がより具体的である。

草紙	共通	物語
わた（綿）あやにしき（綾錦）ふるぎぬ（古衣）うすぎぬ（薄衣）おほんぞ（御衣）おんぞ（御衣）かりぎぬ（狩衣）きぬ（衣）くつ（沓）なかびき（中引）	えぼうし（烏帽子）あしだ（足駄）	きがへ（着替）ふるぎぬども（古衣）ふるこそで（古小袖）べべ（幼児語）あさごろも（麻衣）うはぎぬ（上衣）やぶれぎぬ（破衣）かたびら（帷子）はかま（袴）すそ（裾）そで（袖）たもと（袂）わらふだ（円座）ずず（数珠）

(3) その他

二本共に所属語彙が多い類であっても、さらにそれぞれの下位分類において、「物語」語彙が「草紙」語彙にまさる類をいくつか見出すことができる。

(イ) 作用・変化に関する「用」の語彙について

この下位分類をさらにくわしく見ても、「草紙」と「物語」の関係はこの類の総計と同じく大体1対2の数で示されるが、2.158の類（増減、伸縮、広げ・深め・早め・薄め、強め・弱め）に関しては「草紙」の語彙は全くなく、「物語」のみに所属語が見える。具体的にあげれば「ます（増）・みちみつ（充満）・みつ（満）・さしのぶ（差延）・すくむ（竦）・ちやうず（長）・ひろごる（広）・よはる（弱）」である。

(ロ) 精神・感情・感覚に関する「用」の語彙について

この下位分類をさらにくわしく見ると、明らかに「物語」の所属語が多いのは2.300～2.303の類（感覚・気分・対人感情・表情）に属する語で、共通語「わらふ」、「草紙」のみの5語「かまふ（構）・こる（懲）・したふ（慕）・めづ（賞）」に対して、物語25語がここに入る。「いたむ（痛）・めざむ（目覚）・ゑふ（酔）・あきる（呆）・いきどほる（憤）・いらつ（苛）・おくす（憶）・きやうず（興）・たのしぶ（楽）・なぐさめ（慰）・よろこぶ（喜）・わぶ（侘）・あまゆ（甘）・いとふ（厭）・うらむ（恨）・うらやむ（羨）・なさけぶ（情）・ほる（惚）・いきまく（息巻）・うちなげく（打嘆）・うめく（呻）・しかむ（顰）・なげく（嘆）・ほほゑむ（微笑）」

(ハ) からだに関する「体」の語彙について

この下位分類を見ると、物語の方が明らかに語彙が多いのは1.572の類（胴・胸・背・腹）に関する語で、共通語は「しり（尻）・こし（腰）・はら（腹）」の他、物語では「おなか（腹）おゐど（御居処）せなか（背中）ほがみ（陰上）ほほ（懐中）ももじり（桃尻）ゐどころ（居処）」がある。草紙のみの語は「かた（肩）」（「しりこし（尻腰）」もあるが分割すれば共通語とみなせる）。

(イ)(ロ)は「物語」が絵に依存せず場面を説明することによるものであろう。

(ハ)については、場面説明も関連する一方、「しり」に対する「おゐど（御居処）ももじり（桃尻）ゐどころ（居処）」や「はら」に対する「おなか」という対立から、時代差というよりも、「物語」のある種の表現意図と見てよい。このような対立はさらに放屁を表わす語について草紙

では「へひり」、物語では「おならこき」（但し画中詞）を用いている。ちなみにこの作品の重要なテーマである「へ（をひる）」ということばそのものは、「草紙」にはしばしば見えるが、物語では先の画中詞の「おならこき」のみである。

(2) 考察2——対立する語彙から見て

基礎作業によって語彙を分類してゆくと、同じ分類番号でありながら二本で対立が見える語がいくつか出てくる。それらを挙げてみると（前者が「草紙」後者が「物語」）、

(a) 和語と漢語の対立

下臈⇔しもひと　とひ人⇔長者　なさけ⇔慈悲　せんはう⇔せんかた

(b) 語の交替の対立

ざえ⇔げい（芸）　きしろふ⇔あらそふ　せだむ⇔せむ　おいおい⇔なふなふ

(c) 語の位相の対立

はら⇔おなか　しり⇔おゐど・ゐどころ・ももじり　へひり⇔おならこき

(d) 敬語動詞の対立

さふらふ⇔はべり

(e) 語形変化の対立

ねうす⇔ねんす　かしこむ⇔かしこまる　をしふ⇔をしゆ

以上の中で、用例数がある程度あり、はっきりとした対立が見られる(b)の「ざえ」と「げい」の対立、用例数はあまりないが、同種の対立が見られる(c)について、それらが何を意味するのかという点について考えてみる。

①「ざえ（才）」と「げい（芸）」

放屁の特技について、「草紙」では「ざえ（才）」を、物語では「げい（芸）」をもっぱら用いている（ロの最初の例は放屁に限らない）。

(イ)「草紙」の場合

・（男）めもあやなる、さえするやつかな（秀武の放屁の芸を見て）

・（秀武）かゝるさえする人、世に又あらはこそ、きしろふ物もあらめ

・（福富）この秀武といふやつのする、さえをたに、殿原はめてさせ給うなり

(ロ)「物語」の場合

・（媼）士農工商の外の、ゆふみんは、ひとつ、ゆへつける芸の、侍りてこそ、名を四方に、かかやかし、世を渡るものにてさふらへ

・（乏少）とてもの御よしみに、其御薬、まつ一たひの芸、一勤るほと、たまはりてよ

・（福富）ちと、おなかを、つくろひて、その芸をなさんと思ふ、二時はかりこなたに、塩湯ぬるぬるとして、もちひ給へ

「ざえ」は「才」の漢字音が和音化したもので、平安和文脈に見られ、「学問・教養」と「技芸・芸能」の二つの意味を合わせ持っていた[11]。

・けふはわざとの文人も召さず、たゞその才（ざえ）かしこしと聞こえたる学生十人召す。（源氏物語・少女）

・他事よりは、遊びの方の才（ざえ）はなを広う合はせ、かれこれに通はし侍こそかしこけれ、ひとりごとにて上手となりけんことこそ、めづらしきことなれ。（源氏物語・少女）

一方の「げい」は平安和文脈では全くその用例が見えない。但し、『小右記』等の漢文日記には「才」「芸」の用例が共に見られることから、「げい」は和文脈で使われなかった語と見てよい。（但し、漢文日記では「技芸」の意の「才」は「才の男」のような特殊な使われ方をしている。）

・見牒案内、始自文書手跡無所恥、不論才之浅深、可作返牒〔牒の案内を見るに、文書手跡より始め恥ずる所無し、才の浅深は論ぜず、返牒を作すべし〕（小右記・寛仁三年九月二十三日）

・賭射三度射的射的三、為賞其藝、可定遣也〔賭射ノリユミ三度、的三を射る。その藝を賞せんがため、定め遣わすべきなり〕（小右記・寛仁二年四月二十四日）

ところが、中世に入り、「芸」が、まず「武芸」の意味で、後「技芸」の一般的意味を表わす用語として並び用いられたが、「才」の一方の意味を吸収し、「才」はその「技芸」の意味を失ってゆく。「才」は「学問・教養」として用いられ、その「技芸」の意味を「芸」にほぼ完全に譲っているかのように見える。

・高倉宮……御手跡ナドウツクシウアソバシテ、和漢ノ才秀給ヘル仁ニテヲハセシカバ（延慶本平家・第一本）

・かたち心ざまよき人も、才なく成りぬれば、品下り（徒然草一段）

・頼政ハ六孫王ヨリ以来、弓箭ノ芸に携テ、未ダ其不覚ヲ聞カズ（延慶本平家・第一本）

・禅師が娘、静と言ひける、この芸を継げり（徒然草・二二五段）

以上のことから判断すれば、「草紙」の「ざえ」の使い方は中世以前の用法ともみなされなくもない。

とすれば、冒頭で紹介した榊原悟氏の、「福富草紙絵巻」が鳥羽僧正の時代（12世紀）に成立した『ざれ絵』以前に遡る可能性がある[12]という指摘もあながち無理とは言えない。絵は14世紀のものであっても、詞は古いものを踏襲しているかもしれない。

一方、「才」「芸」について古辞書にあたってみると（表２）、『字鏡集』に注目すべき記述がある。

《表２》

古辞書	才	藝	備考
篆隷万象名義【高山寺本】（９世紀）	在来反材、質伎芸 力、用、道、草木初生	魚世反材、求、准、 法制、極、常、静、	高山寺本は永久２年(1114)の奥書
新撰字鏡【天治本】（901―923）		魚祭反	

色葉字類抄【二巻本】	才サイ材同（サ人事）	藝ゲイ（ケ人事）	
色葉字類抄【三巻本・黒川本】	サイ　昨哉反　文ー（サ人事） （衒才・逸才・英才・高才・鴻才・秀才・弁才など）	云人之能也ケイ魚祭反才ー＊皮ー雑ー等也（ケ人事）	＊世俗字類抄は「伎芸」。衒才・逸才・英才・高才等
類聚名義抄【観智院本】	タカフ　禾坐イ（僧下一一三）	魚世メ…ウフ　マト　ナレタリ　ケ衣　ヨシ　オキテシツカナリ　ナスラフツネニ　ヲサム　ナリハヒユタカナリ　禾サ　ウク（僧上四五）	＊アクセント省略
字鏡抄【七巻本・永正本】1245	サイ　タカラ　ヒサク（手部）	キ　ナハ　シツカナリ　サヘ　ナスラフ　ヨシ　ヲキツ　ウフヘクヤス（艸部）	静嘉堂文庫本＊龍門文庫本・寛元本もサヘあり。
字鏡鈔【二十巻本・天文本】	サイ　ヒサク　タカラ（手部）	ニキ　ケイ　ヲヽツ　ヨシナハ　サヘ　シツカナリウフヘクヤヌ　ナ爪ラウ（艸部）	＊白河本もサヘあり。
聚分韻略【慶長壬小版】1306	サイ　文ー　ワツカ　ハシメ	ケイ　□イ　才ー　ワサ	
伊呂波字類抄【十巻本】	サイ　文也（サ人事）	ケイ　才ー　伎ー　雑ー等也	
下学集【古本系】	（宏才）	（藝能）	
温故知新書	（才覚・宏才）	藝ケイ	
節用集【古本系】1444—1487	（才覚・宏才・口才・弁才）	（藝能・武藝・伎藝）	
節用集【文明本】	一才　シワザ	藝　ゲイ・シワザ	「才」はすべて熟語の傍訓
節用集【印度本系】	（才覚・才学・宏才）	（藝能・能藝）	
塵芥	才　サイ　サエ（態藝門）	（藝能・藝才）	清原宣賢自筆本
運歩色葉集	（才覚・才智・才漢・才人・宏才）	（藝能・武藝）	
倭玉篇【弘治２年本】			
倭玉篇【享禄５年本：玉篇略】		ケイ　ヨシ　ヲキテ	
倭玉篇【慶長15年版】	サイ　モチ井ル　ワヅカシワザ	ゲイ　ワザ　シハザ	黒川本類字韻シワザあり。
倭玉篇【夢梅本】	サイ　草木之初也　モチフ又才能也　チカラ　スガタワツカニ		
倭玉篇【篇目次第】		魚祭切　ケイ也　ナスラフシツカナリ　ヨシ	
落葉集【慶長３年刊・耶蘇会版】	さい　わざ（色葉字集・小玉篇）	げい　わざ　とし　おきて（本篇・色葉字集・小玉篇）	

日葡辞書【慶長8年刊・長崎版】	(sai) 工夫の才、または知恵　例、サイアルヒト	＊（藝者・諸藝・一藝）	＊注釈中に藝(guei) あり。

『字鏡集』には二つの系統（字鏡鈔と字鏡抄）があるが、そのどちらにも「藝」の字に「さへ」という読みがある。この辞書は、寛元3年（1145)、鎌倉初期の学者、菅原為長の撰と伝えられるが、室町期に下る写本のみが存し増補があると見られ、その真偽も正確な成立時期も明らかではない。ただ、山田忠雄氏によれば、ある部分は「鎌倉から室町初期」の言語を反映していると見てよいとも言われている[13]。この「藝」に「さへ」の読みがあるのは管見では『字鏡集』の系統のみである。

また、『文明本節用集』では、「才」については、見出し字としての記載はないが、「多才」「文才」「才覚」など20の「才」を含む熟語が記載されていて、その「才」の部分にすべて「しわざ」という訓がついている。一方、「藝」については、見出し字として「しわざ」という訓がある以外に、「藝」を含む「一藝」「武芸」など12の熟語の「藝」の部分すべてに「しわざ」と訓がある。同じく、『慶長15年版倭玉篇』にも、「才」「藝」の双方に「しわざ」という訓がある。さらに、「才」と「芸」は「才芸」という熟語を構成したり、並び用いられる傾向もある。これらのことから、室町期においても、「才」「藝」の混同の可能性は否定はできない。

なお、表2に見えるように、『日葡辞書』の時代には、中世文学作品に見える状況と同じく、「才」と「芸」は別の概念を表す語として認識されていることがわかる。

以上のことから、「草紙」における「ざへ」は、室町期においても「げい」との混同はありうるが、可能性として『字鏡集』の編纂された鎌倉時代の言語の反映も否定できないことを述べておく。

②「はら」と「おなか」

「草紙」では「はら（腹)」を用いるが、「物語」では「おなか」を用いる。「物語」には「はら」の単独例はなく[14]、「はらくせ（腹癖)」「すきはら（空腹)」の例はある。

(イ)「草紙」の場合

- (媼）朝顔のみ、一にてたに、腹のうちに入ぬれは、はらとくる物なり……まつ、腹とゝめんことをやは
- (医師）朝顔のみは、ひとつ□□、腹とくる物なり

(ロ)「物語」の場合

- (福富）是かまへて、すきはらに、すかせたまふな、ちと、おなかを、つくろひて、その芸をなさんと思ふ、二時はかりこなたに、塩湯ぬるぬるとして、もちひ給へ
- 道すから、お中すしはり引つりて、かみなりのことく、なりけるを、念しつゝ、いところをすへて、いそく
- 藤田、お中はいたけれと、くい物に心入たる、おかしや、さもしや、あまりにこしのひきつり、お中のいたむに、堪すして、立出むとしけるか、取はつして、さと、ちらし侍る

は、水はちきのことし

女房詞の資料で「おなか」は腹の意味の「おなか」ではなく、「飯」「綿」などに言う。

・いひ。御だいぐご。おなか。だいりには。いひにかぎらず。そなふるものをくごといふ。（大上臈御名之事）

・わたは、御なかといふ。（女重宝記一・五）（元禄5〈1692〉）

ただ、『日葡辞書』補遺（1604）によれば「おなか」は次のように「婦人語」とあるので本来は女性語であったとみなされる。

・Vonaca ヲナカ（御中）腹。例、Vonacaga varui.（御中が悪い）下痢をする。これは婦人語である。

この「おなか」は17世紀初頭以降の資料にしか管見では見出せない。

・昨日の御薬にて、一段とおなか心もよく候（昨日は今日の物語・上）

・汲かはすさゝのおなかにみちぬれば身をじゆくしとぞ我は酔たる（古今夷曲集）（寛文6〈1666〉刊）

後の例は、「物語」の画中詞「九献にこそ、ゑひつらめ、しゆくしくささも、ましりて侍るかし」と関わりがあるかもしれない。

「おなか」以外に、女房詞や幼児語と考えられるものとして、「おゐど」「おなら」「くこん」「しし」「ゐどころ」「ねんね」「べべ」「めなしどち」がある。「くこん」については、古い女房詞資料にもあり、他の御伽草子でも見出すことができる。

・内裏仙洞には一切の食物に異名を付けて被召事也……飯を供御、酒は九献（海人藻芥）

しかしながら、その他の一連の語は、17世紀初頭の例しかないか、もしくは例そのものが他に見出せない。

・Ido イド（居処）人の今居る所。例、Idouo tatctu.（居処を立つ）今居る所を立ち去る。Voido（御居処）尻や臀部の意味で、婦人が人に敬意をこめて話す時に用いる語。（日葡辞書）

・Xixi シシ（しし）子どもの小便。婦人語。Xixiuo suru. 子どもが小便をする。（日葡辞書）

・紙張のおなら　何ぞ　かミくさ（寒川入道筆記20）（慶長18〈1613〉）

もちろん、17世紀初頭の例しか見出せないからといって、それ以前に全く使われなかったということではない。「放屁する」意で説話等には「鳴らす」が見られ、その名詞形が女房詞として使われたのは、17世紀初頭よりずっと以前であったと思われる。女性達の話し言葉の世界で使われたのであって、文献に登場しないだけなのであろう。ただ、文学作品の中に、このような語が使われ始めたのは、他の文献にも見え始める17世紀初頭をそれほど遡ることはないのではないか。

そして、この作品のテーマからいって、上品とはいいがたいこれらの語を女性語を以て表現したことに大きな意味があろう。そこに、「物語」作者の強力な意図があるとみなされる。

四　結論

以上の考察から、次の点を結論としてあげる。

(1)「草紙」は、一部地の文もあるがそのほとんどが登場人物の会話で成り立っている。その話者の意識は絵に描かれた世界を越え、読者に向けられることはなく、話者の意識は常に絵の中に場面を共有している自分と相手にある。従って、場面や状況説明等に関わる語彙は必要としない。一連の絵がそれを説明しているからである。絵がなければストーリーが成り立たないと言っても過言ではない。また、その会話のことばは単純、素朴、率直であり、第三者に対する特別な言語意識はない。

一方「物語」は地の文が重要な要素を占め、状況を具体的な物の名を以て、あるいは動きや感情をことばを以て、説明しようとする。ここで問題となるのは、叙述がどの程度絵によっているかという点である。

三条西公正氏のように、「草紙」の絵とは別個に「福富長者物語」の本文が存したのではないかと見る説もある[15]。が、その元となった本の存在が確認できないこと、「物語」の叙述が絵なくしてはありえない箇所もあるという指摘から、横山重氏のように「福富草子」の下巻の絵から「福富長者物語」の本文が作られたとされる説[16]の方が妥当であろう。確かに「物語」の展開は、「草紙」下巻をそのまま踏襲した絵の順序によっている。

「物語」の文章は冒頭の部分を例外とすれば、御伽草子の中では珍しい文体である。すなわち、乏少夫婦の会話の部分から後、地の文は「せかする」「いふ」「つかねてをる」等と現在時制で続いていく。この点について美濃部重克氏は「文が一種の絵解き的文章としての性質を持つことを示している」とし、「物語」の文章を「絵を面白く鑑賞できるようにとの意図のもとに作文された一種の戯文」と見ておられる[17]。

実際に文末に数例用いられる「をる」は「いる」に比べ状態性が強く、絵を説明する場合にきわめて適当な補助動詞であることから考えても、美濃部氏の説に納得がいく。また、「草紙」に比べ、場面に登場する人や物の名に関する語彙が豊富であることも絵解き的文章である所以であろう。その結果として、松浪久子氏の指摘されるように「ある意味では文学的達成であったが、別なる角度からは、豊かな想像性享受史を固定させ、この物語の終焉を招いた」[18]のであろう。

ただ、見方を変えれば、絵だけでの享受あるいは人物の台詞だけ付したものに、「物語」成立時の人々にとっては満足できなかったといえるのではないか。

(2)　成立時期については、表記や文法から見て「草紙」の方が「物語」より古いことは確かにいえるが、その成立時期については確たることは言えない。

しかしながら、「草紙」の「ざへ」の使い方から見て、『字鏡集』が菅原為長の時代、平安末～鎌倉初期の言語を反映しているのならば、一般に言われている「草紙」の成立時期「14世紀末」よりも溯れる可能性はあるのではないか。「草紙」に見られる「あ」系の一人称「あが」や「あれ」、同じく一人称「まろ」や二人称「おれ」、敬語補助動詞「たいまつる」「たうぶ」「たまふ

(下二)」などの語も、鎌倉時代の言語の反映と考えた方が納得がゆく。ただ、位相の問題があるかもしれない。

一方、「物語」の成立は逆に17世紀に近い時期まで下るのではないか。一連の女房詞や幼児語が文芸作品の中に現れてくるのが17世紀初頭だからであるが、実はその他にも、この作品がそれほど古くないのではないかと思わせる語がある。名詞の「いうみん（遊民)」「うつき（鬱気)」「ひみつ（秘密)」「いいわけ（言訳)」「おごう（御御前)」「すきばら（空腹)」「ひとかみいぬ(人嚙犬)」「まちや（町屋)」「みちくさ（道草)」や、動詞の「いぶる」「きりかく（切掛)」「すじばる（筋張）四」「すりむく（擦剝）下二」「せかす（急）サ変」「たがやす（耕）四」「めざむ(目覚）下二」「もちふ（用）ハ上二」の、形容詞「しつこし」「ねむし（眠)」、擬態語「ぬるぬる」「めらめら」なども、17世紀初頭またはそれ以降を思わせる語なのである。

(3) 「物語」の文章には、あきらかにある種の表現意図がある。すなわち、品のない語をストレートにあらわさない、乱暴な語は使わない等の意図が強烈にあるように思われる。「放屁」を題材にした物語を、ここまで格調高い文章に作り上げた作者の文才と教養を思わせるとともに、ある種の教育的意図を感じるのは私だけだろうか。

これほどに婦人語や幼児語を見出すことができる御伽草子は他にはない。いや御伽草子以外の文芸作品にもないのではないか。すなわち、この「物語」の成立の背景には、決して上品ではないストーリーを、婦女童幼にも楽しめるように作文するという意図があったのではないか。

あるいは、ある種の地位にある女房たちが仕えている家の子息や子女に物語を読ませるためのものであったかもしれない。「福富長者物語」は絵巻の形態が多く、版本のような形では普及していないことから、享受者層に限りがあると想像される。

16世紀末～17世紀初頭の上流武家の周囲に仕えていた人間（もしかしたら女性？）が、「物語」の文章を作成したのではないか、と考える。

註

1）松本隆信氏の『室町時代物語現存本簡明目録』（奈良絵本国際研究会編『御伽草子の世界』〈三省堂、1982〉所収）によれば、A系統として、京都妙心寺の春浦院蔵の室町時代頃の絵巻を代表とする、主として二巻の体裁（上巻欠も多い）の絵巻群、B系統として、赤木文庫や大東急記念文庫等を代表とする、一巻体裁の絵巻群が記されている。

2）たとえば、三条西公正氏は春浦院蔵「福富草紙」に代表される詞書と流布本は主人公名が異なることから、流布本は「福富草紙」とは別本であると考え、「従って現今流布の「ほくせうの藤太」を主人公とする福富草子は本来のものでは無く、後世の類似噺であるか或は異なる題名を有つたもので、之を福富草子と呼ぶことは餘り芳しく無い」と述べておられる。(「福富草子絵について」『国語と国文学』11-11、1934)

3）横山重氏は、『福富長者物語』（大東急記念文庫蔵）の系統の本は「春浦院本と限定せず、春浦院本系の下巻の絵をそのまま模して、しかし其本文は、春浦院本系の詞書を追ふことなく、全く別に作ったものと思はれる」(『室町時代物語集五』解題）と、また、美濃部重克氏は「「福富長者物語」の絵は「福富草子」下巻の絵を模写したものである。そしてその物語の本文の展開は、錯簡があると考えられるあわせて十三図の絵を、ひたすら右から左へと辿ったものとなっている」(「『福富長

者物語』本文攷」『中世伝承文学の諸相』〈和泉書院、昭和63年〉所収）と、それぞれ述べておられる。

4）『日本古典文学大辞典』（岩波書店）の「福富草紙」の項目による（岡見正雄氏解説）。また、黒川春村『古物語類字鈔』では、その「文体の古雅なる」ことから、春浦院本の原本にあたるものは「南北朝の時代などにできたのであらう」とする。

5）「放屁譚三題　附『ざれ絵』詞書」（『サントリー美術館開館25周年論集』２号、昭62）

6）注５前掲論文。ただし、小松茂美氏によれば、サントリー美術館蔵『ざれ絵』は二巻であったものが後に一巻に仕立てられたもので、本来の巻の筆者や時代は異なるという。すなわち、「賜物くらべ」の巻は平安時代末、放屁合戦のある巻は鎌倉時代中期のものと推定されている。榊原氏の問題にしている箇所は後者の部分に存する。

7）小松茂美氏は「福富長者物語」は「「福富草紙」（春浦院本・クリーブランド美術館本）を改作した室町時代（15世紀末～16世紀初）の作品であろう」とされる。（『能恵法師絵詞　福富草紙　百鬼夜行絵巻』（続日本の絵巻27）解説、中央公論社、昭和54）

8）『新修日本絵巻物全集18』（角川書店、昭54）、『日本絵巻物大成25』（中央公論社、昭54）等に、影印が収められる。

9）「仮名文　御伽草子」『漢字講座６　中世の漢字とことば』所収（明治書院、昭63）。なお、これらに対して、「秀祐之物語」「小町双紙」は共に漢字使用率は約12％、異なり語はそれぞれ122字、186字で、他作品と隔たりがあるという。「福富長者物語」はこれらよりもさらに漢字使用率が高い。

10）分類番号の、整数部は品詞を表し、小数点部は意味範疇を表す。小数点第１位は、１は抽象的関係、２は人間活動の主体、３は人間活動――精神活動及び行為、４は生産物及び用具、５は自然現象となっている。

11）以下、「才」と「芸」の交替については、お茶の水女子大学国文学会における、筆者の口頭発表「「ざえ」から「げい」へ―――その意味の変化を考える」（平12・12・２）に基づく。

12）前掲注５参照

13）山田忠雄「字鏡鈔と字鏡抄」（『本邦辞書史論叢』三省堂、昭42）

14）次の例が画中詞に見られるがどうか。他本では「はこ」や「はゝ」。
（児を負う女）あれを見て、はらたれさせられな、ねんね。

15）注２前掲論文。

16）注３前掲論文。

17）注３前掲論文。

18）松浪久子「『福富草紙』攷――付、大谷女子大学蔵本『福富草紙』解題・翻刻」（『大阪青山短期大学紀要』９、昭56）。